ニヒリズムの現在

―― 総動員と技術の本質について ――

山　本　與志隆

序

現代を「ニヒリズムの時代」と規定するとしたら、それこそ時代錯誤と言われるであろう。確かに19世紀末にF. ニーチェが自らを「ヨーロッパの最初の完全なニヒリスト」と称したことは著名な事実である。そのような自己規定のもとで、自身が語るのは、19世紀末当時から二世紀間のヨーロッパの歴史である、とニーチェは告げていた。つまりこのニーチェの見立てによれば19世紀末から現代の21世紀に亘る長い期間はニヒリズムの時代であるということになる。しかし、そのニーチェの思想を特徴づける際に用いられる「実存主義」という立場は、既に20世紀の終わりには過去のものとなってしまった。「神の死」という決定的な事態も、特に大きな衝撃を与えることがなくなって久しい。時折、21世紀の現代日本において「ニーチェの言葉」が顧みられることはあっても、それは最早「ニヒリズムの到来」を告げる孤高の哲学者の言葉としてというよりは、むしろ我々の日常に「哲学的な」色合いを添えてくれる「箴言」としてであるように思われる。その意味で、現代をニヒリズムの時代と評することには、多かれ少なかれアナクロニズムとの誹りを免れないように思われる。

それでも、ここでは、現代を「ニヒリズムの時代」であると規定したい。いや、より正確に述べるなら、「ニヒリズム」の極まった、「最極端のニヒリズムの生起する時代」として捉えたい。このような規定を証拠立てる事象は数多見

いだせる。例えば、現代の日本に特徴的な事例として、生きる目的や意味を見出すことができず、虚無を抱えて自暴自棄的な犯罪に走る事件や、若者をも含めて、自殺を選択する多くの人々のあり方は、ここ数年来、人々に衝撃を与えているところである。一方、その反動としては、上述のように既に自明となって、それを口にすることでは特に人に事新しさを感じさせることがなくなってしまった「神の死」という事態に対して、その空白を埋めてくれるものを「精神世界」に求めようとする人々の存在も、ニヒリズムという現実を逆証するものと考えることができる。また他方で、そのような「神の死」を決定づけた科学技術の際限なき進歩発展、およびその実用化に際しての行動規範の欠如と、それに起因する大規模災害の発生、さらにそれを目の当たりにしても、そうした技術的所産の拡大を食い止めることのできない理念の欠如、これらは21世紀の現代に生きる我々日本人が日々目にし、耳にする事実である。そのような意味で、現代はまさに「ニヒリズムの時代」と言って、決して過言ではないと見ることができる。

そこで、このような現代のニヒリズムに直面し、その状況を正しく把握することを目的として、本稿では1930年代に、ニーチェの思想を引き受ける形で「ニヒリズム」に独自の対し方を示したM. ハイデガーとE. ユンガーの思想を解釈していきたい。それぞれの示した思惟を解釈すること、そしてそれを通して、ニヒリズムの根本にある事柄を剔抉することが、本稿の第一の課題である。さらに、それを踏まえて、今後も「ニヒリズムの時代」を生きる我々に求められるあり方を示唆することを試みたい。その際、我々の導きとなるのは、ニヒリズムを根本まで思惟したものとしてのニーチェであることは言うまでもない。そのニーチェに対して対照的な関わり方をした二人の思索者、ハイデガーとユンガーの思想を、まずはユンガーの「総動員」と「労働者」を確認し、それがニーチェの思惟とどのような連関のうちにあるかを確認した上で、それらがハイデガーの思惟、とりわけその技術論にどのような影響をもたらしたかを確認していく。以下、本論は３つの部分に区分される。

１．ユンガーによる「総動員」の思想

２．総動員される「労働者」の形態
３．ユンガーに対するハイデガーの立場

１．ユンガーの「総動員」の思惟

1895年生まれのエルンスト・ユンガーは、第一次世界大戦への自身の従軍体験に基づいて多くの日記、随想、小説その他を発表している。その中で、1930年に発表された『総動員（Die Totale Mobilmachung）』は、大戦での「総動員」のあり方を取り上げ、次のように特徴づけている。19世紀半ばまでの「部分的動員（die partielle Mobilmachung）」は、統治者の周辺で決断され、その周囲の者によって戦われるという仕方で、「君主制の本質」に対応していた。それに対して、「精神や金銭や『国民』の抽象的な形式」として捉えられる、「成長しつつある国家民主主義の諸力」のすべてが軍備に関与せしめられるような諸関係の内へと、そうした動員の尺度が、踏み越えていくことによって、「総動員」は特徴づけられる[1)]。そして、事態は次のように記述される。

> ［19世紀までの「部分的な動員」とは異なり］今や目につくことは、エネルギーへの生の転換が日増しに進み、可動性を高めるためにあらゆる結びつきの内容がいや増して一時的なものとなっていくことが、動員の概念にますます深刻な性格を与える様子である。（EJ, Bd. 7, S. 125）

ここでは、かつての君主制のように国家のごく一部が戦争を決断し、その目的のために君主の支配の及ぶ一部の人民が兵士として、また国家の物資の一部が戦争のための資材として駆り出されるという事態ではなく、「国家民主主義」の名のもとに、国民と国家の物資の全てが戦争遂行のために駆り出されることになる。したがって、このような総動員体制の下では、平時の人々のあらゆる「生」が、総体として戦争遂行のための「エネルギー」へと転換され、生活上のあらゆる「結びつき」は唯一の目的としての戦争遂行のために駆り出され

ることが可能となるように、その結合を「一時的な」仮初めのものとするようになる。こうした状態にあっては、全ての存在者が一律の尺度で測定されることで、そのもの自身が元来有していた本来の「意味」や「価値」はすべて平準化され、無化されることとなる。そして、戦争遂行のために可能な限り使用しやすいもののあり方へと変様せしめられ、戦争遂行という唯一の目的のもとでのみ存在せしめられることとなる。こうした事態の帰結として、平時の産業として人々の生活を支えてきた物流産業や食料生産業から、「運輸、食糧、軍需産業という新種の軍隊が成立する」と言われ、総じてこれらは「労働の軍隊」(EJ, Bd. 7, S. 126) と呼ばれるようになる[2)]。

我々は、ここに記述された事柄を見て、これらは「第一次世界大戦」という個別的な状況において生じた、特殊な出来事である、と言うことができるであろうか。ユンガーが自身の体験に基づいて指摘するような「総動員」という出来事が生起するのは、すでに歴史の中に落着して、過去のものとなってしまった一つの事例においてのみであった、と言うことができるであろうか。

> この［総動員という］行為を通じて、広く分岐し、様々に特殊化された現代生活の電力網が配電盤の独占的な制御により、戦争エネルギーの大きな流れへと引き込まれるのである。(EJ, Bd. 7, S. 126)

この記述を見る限り、「総動員」は、我々の生活を「制御」し、支配することによって第一次世界大戦という「戦争エネルギー」へと導いていくものとして理解されているように見受けられる。しかし、上の問いに答えるように、ユンガーは次のように言う。

> 人間の組織能力が血まみれの凱歌をあげた後期物量戦では、あの壮大でもあり恐ろしくもある光景さえ見られた。しかしながらこれら全てのものにもかかわらず、究極の可能性はまだ達成されていなかったのである。このプロセスの純粋に技術的な側面に考察を限定したときでさえ、究極の可

能性が達成されるのは、戦争という出来事のイメージが予め平時の秩序の中に描き込まれるときだけである。(EJ, Bd. 7, S. 127)

確かに、第一次大戦の「後期物量戦」においては、我々の生活の全てが戦争遂行へと巻き込まれていくことによって、「壮大」で「恐ろしい」光景を見せつけられた。このような光景は、我々が決して忘れてはならず、絶えず立ち戻り我々自身の問題として捉えねばならない根源的な光景であろう[3)]。しかし、こうした出来事は戦争遂行という事態においてその可能性の全てを尽くしているわけではない、とユンガーは言う。

総動員は人為的に実施されるというよりも、むしろ自ずから生じると言った方が適切である。それは戦争と平和の双方において、秘密に満ちた逃れようのない要求の表現であり、我々をこの要求に服せしめるものは、大衆と機械の中に置かれたこの生活なのである。(EJ, Bd. 7, S. 128)

つまり、総動員は「戦争遂行」という明確な目的設定の下で、その目的に向けた全ての国民がそれぞれの意志に基づいて、一丸となって突き進むことで生じてくる出来事ではないのである。ユンガーによれば、むしろ、総動員は「自ずから生じる」ようなものである。戦争と平和という状況の如何に関わりなく、「秘密に満ちた逃れようのない要求の表現」として、生じるべくして生じてくるものであると言う。「大衆と機械」の中で、我々の「生活」が、この要求の表現としての「総動員」に服せしめられる、というこのユンガーの記述が正しいとすれば、まさに第一次世界大戦の開戦からちょうど一世紀を経た、今日の我々の生活こそが「総動員」によって突き動かされているものである、ということになるのではないだろうか。おそらくこうした点を捉えて、先に平時の産業から、新たな軍需産業が成立してくるということを見たユンガーは、次のように言う。

かくして、個々の生活が全てますます明白に労働者の生活となり、また騎士の戦争、王の戦争、市民の戦争の後に労働者の戦争が続く。(EJ, Bd. 7, S. 128)

現代の個々人の生活が今や「労働者（Arbeiter)」の生活であることは、我々にとって自明のことであると言っても過言ではない。いや、それどころか現に多くの者たちがその時々の経済状況に左右されながら、労働者となるべく、日々努力しているとさえ言うことができる。そのような「労働者」の戦争が、歴史的経過の中で「騎士の戦争」、「王の戦争」、「市民の戦争」の後に続くとユンガーは規定している。ここで言われる「労働者の戦争」は、歴史的な事象としての第二次世界大戦でも、またその後の国家間、民族間の戦争や紛争等を言っているのでもない。ましてや、比喩的な意味で、それぞれの産業内での開発競争や販売競争を言ったものでもない。そうではなくて、「労働者の戦争」と言われている以上、近代の市民革命に象徴される「戦争」が終結して後の、職業軍人や戦闘員だけでなく、非戦闘員までもが否応なくそこへと巻き込まれたような「第一次世界大戦」に象徴されるように、実際に戦闘状態にある戦時のみならず、本来は戦時とは区別された平時の我々の生活のあり方について言われたものに他ならない。したがって、ここで「総動員」されるものは、平時においておのおのの労働に勤しむ我々自身なのである。総動員されていると自覚するか否かにかかわらず、いやむしろそのように自覚しない状態においてこそますます、我々は「秘密に満ちた逃れようのない要求」に求められるままに動員されているのである。このユンガーの主張が妥当性を有するものであるか否かについて、次節においては、さらにユンガーの「労働者」の規定を検討することを通して、確認していきたい。

2．総動員される「労働者」の形態

ユンガーは先の『総動員』に続いて、1932年に『労働者　支配と形態』[4)] を

著している。そこでは、1930年代当時の、市民社会の観点から見られた「労働者」のあり方が次のように記述されている。

> 労働者は生死を賭した戦いを宣言する。そのとき、根本的に被雇用者（ein Angestellter）に他ならない個々人から戦士が、大衆から軍隊が生まれ、社会契約の変更に代わって新たな命令秩序が築かれる。このことが労働者を交渉、同情、文学の領域から引き離し、行動の領域へと高める。労働者の法的な結合は軍事的な結合へと変化する。（EJ, Bd. 8, S. 32）

我々はこの記述の内に、先に見た戦時における総動員の様態が、平時における労働者のあり方へと転化されていることを確認することができる。あるいは別の言い方をすれば、「総動員」という語が、第一次大戦の戦闘のあり方を契機として、戦時という特殊な文脈で用いられるのではなく、平時の「労働」というごく普通の、平均的日常性を特徴づける言葉として用いられている、ということである。このことは、前節で確認したユンガーの思惟のあり方からして、当然の帰結であると考えられる。というのは、ユンガーが第一次大戦における「総動員」に言及したのは、むしろそのような仕方でしか存在しえなくなった当時の人々のあり方を際立たせたかったからであると考えられるからである。

ここで重要なことであるが、『労働者』を著すに当たって、ユンガーはニーチェの思想を強く意識していた[5)]。ユンガーが特にここで導きの糸として念頭に置いていたのは、ニーチェのニヒリズムの思想であったと考えられる。というのは、上述のように、戦時と平時の境界線が漠たるものとなり、平時における人々が、あたかも戦時における兵士のように単なる物量として扱われるとき、人間存在本来の、そのもの自身に固有の価値や意味は無きものとされ、いわゆるニヒリズムの支配する状況が出来することになると考えられるからである。このような状況下においては、人間は本来の人間自身として存在することを奪われて、「労働者」という類型においてのみ、存在することが可能とさ

れるようになる。ここに生起しているのは、人間そのものの存在が無化された究極の意味におけるニヒリズムに他ならない[6)]。というのは、ニーチェがその一世紀前に喝破した、ニヒリズムを象徴する言明は「神は死んだ」であり、さらに言えば「おれたちが神様を殺したのだ―諸君とおれが！」[7)]ということであったが、今や神の死を到来せしめた人間の、その存在そのものが無化されるという、二重化されたニヒリズムのあり方が到来していると考えられるからである。最早これは単なるニヒリズムではなく、多重化された、その意味で究極のニヒリズムであると考えられるのである。

そのような多重化された無化の前提となる事態としてユンガーが思惟していたのは、人間存在の労働者という形態であった。ユンガーは『労働者』の序言において、この書の意図を次のように説明している。

> 本書の企図は、理論を超え、党派対立を超え、予断を超えて、労働者の形態（Gestalt）を、既に歴史に力強く食い込み、変化した世界の諸々の形（Formen）を有無を言わせぬ仕方で規定しつつある活動的な力として、目に見えるようにすることである。（EJ, Bd. 8, S. 13）

そして、ここで言われる「労働者の形態」を「新しい現実」と呼んで、「労働者の形態には従来そこに察知されてきたものを超えるものが覆蔵されているのではないか」（EJ, Bd. 8, S. 37）という問題を提起している。我々はここに、労働者という形態を、「印判と刻印（Stempel und Prägung）」と呼び、1932年当時の歴史の内に明白に刻み込まれた現実と理解する、ユンガーの認識を見て取ることができる。つまり、ユンガーにとって労働者という形態は、ニーチェによるニヒリズムの到来の予告を引き受けた時代の根本的現象として理解されていることになる。

さらに、労働者の「形態」ということでユンガーが思惟していたのは、「部分の総和を超える全体」（EJ, Bd. 8, S. 37）ということであるとして、次のように言われる。

> 19世紀にはこのような超過［部分の総和を超える全体］、このような全体性に拠り所を求めようとする精神は、すべて現実の中に居場所を持たず、それよりも美しい世界にしか居場所を持たないような夢の国へと追放されることが慣わしであった。（EJ, Bd. 8, S. 39）

ここから理解されることは、1930年代初頭のこの時期に既に、労働者としての人間存在のあり方が、従来の形而上学的な把握の仕方を超えたものであるということに、ユンガー自身が思い至っていたということである。ここで言われる「全体性（Totalität）」の語に注を付して、「全体的（total）」という語のより詳細な説明については、自身の『総動員』を参照するよう指示されている。つまり、先に我々が想定したように、戦時において総動員される人々のあり方が、ユンガーの思惟においては、まさに全体としての労働者のあり方、すなわち労働者の「形態」と同定されているということである。さらに、こうした「部分の総和を超えた全体」としての形態は、19世紀以前の思惟にあっては、「現実の中に居場所を持たない」「夢の国」での事柄と考えられていたと指摘されている。このことから、すでにユンガーは当時の人々のあり方が従来の伝統的な形而上学の思惟を超え出たものであることを認識していたことがうかがえる。ユンガーにとっては、労働者は「形態」として理解されねばならないものであって、「観念論」か「唯物論」かといった、伝統的な枠組みの「概念」によっては把握されえないものであった。

そして、このように労働者の形態が従来の形而上学の枠組みに収まるものではないことから、その形態は死に際しても、「魂が肉体の宿を離れる」といった古くからの考えを否定して、「むしろ人間の形態が、空間的時間的因果論的なあらゆる比較の及ばない、ある新しい秩序に歩み入ることとして考えるべきである」（EJ, Bd. 8, S. 40）と言う。このことによってユンガーが言おうとしているのは、20世紀以降の現代に至って、人間存在は従来の形而上学とは別の枠組みで理解されるべきものとして現象しているということである。最も主要な事実は、形態が火と大地に属さないこと、それゆえ形態としての人間が永遠に

属することである（ibid.）。

ここで重要なことは、ユンガーが従来の形而上学的な概念の枠組みを否定する一方で、自らが主張する人間存在の形態については、「永遠」に属するとしている点である。このように言うことによって、ユンガーは従来の形而上学を批判するにしても、やはり永続的なるもの、すなわち「人間の形態の中に常住するもの、人間の生来にして不変不滅の功績、人間の最高の実存、そして人間の最深の証明」（ibid.）として、形態としての人間のあり方を認める、いわば新たな形而上学を構想していると見ることもできる[8)]。たとえば、「形態を見ることは、ある存在をその生の全体的で統一的な充溢において認識することである限り、革命的である」（EJ, Bd. 8, S. 46）とユンガーが言うとき、労働者の形態としての人間存在に、「生の全体的で統一的な充溢」を見ることになる。ここには、従来の形而上学、とりわけ「19世紀の人間の観念」を「公分母」とする、「個々人」や「共同体」といった概念が捉えたのとは異なる、新たな人間存在の規定が見出されていると言える。しかし、これはまさにニーチェが試みたように、伝統的な形而上学の「転倒」に他ならず、転倒以前と以後のいずれにおいても、そうした思惟の根本的な枠組みは存続することになる[9)]。そして、この点こそ、ハイデガーがユンガーを批判する点なのである[10)]。

さらに、もう一つユンガーの人間存在の規定を考察したい。それは、ユンガーが実際に労働者として存在する一人一人の人間を言うときの「個々人（der Einzelne）」に対して、類型として概念化された人間のあり方を言うときの「類型人（der Typus）」である[11)]。この「類型人」は、次のような問いを導くために導入される。すなわち、労働者の形態に属する個々人が、一方で「労働の戦場において殲滅される（vernichtet）無名兵士として現われ」、他方ではまさしくそれゆえに「世界の主人及び整序者として」、「絶対権を持つ支配的な類型人として登場するか」（EJ, Bd. 8, S. 47）という問いである。そしてここで言われる個々人と類型人という、「これら二つの側面は、ともに労働者の形態に属する」（ibid.）と言われている。

この文脈において、労働者が「労働の戦場」において「殲滅される」、すな

わち「無化される」存在として語られていることは、我々の考察の観点からして、極めて示唆に富む。その一方で、類型人が「世界の主人及び整序者」という「絶対権を持つ」支配的なものとして語られていることがさらに重要である。というのは、その後に続けてユンガーは、個々人と類型人とが、19世紀の個人と大衆とからどれほど隔たっているかを強調した上で、次のように言うからである。

> 両者の内的な統一性は、ある新しい秩序の鏡に照らせば、全体的独裁への意志（der Wille zur totalen Diktatur）が総動員への意志（der Wille zur Totalen Mobilmachung）として認識されるのである。（EJ, Bd. 8, S. 49）

ここには言うまでもなくニーチェの「力への意志（der Wille zur Macht）」のユンガー自身の解釈を見ることができる。それに基づいて、労働者の形態に属する個々人と類型人のあり方が解釈され、さらにそれが、全体的独裁へと至る過程の前提として、総動員への意志が解明されている。『総動員』の発表が1930年、『労働者』の発表が1932年であることを鑑みるならば、これらがナチスによる政権奪取前夜の、予言の書と見られたことも首肯されるところであろう。しかし、本稿においては、ユンガーの政治的立場に言及することが目的ではないので、これ以上は立ち入らない。むしろ重要であるのは、これらの規定からどのような人間像が帰結し、それによって世界がどのように立ち現れてくるかということである。この描写から予言されているのは、平時にありながら、いや平時であればこそますます、全体としての目的遂行のために、それと自覚することなく、機械的に駆り立てられる労働者の類型のあり方である。というのは、ユンガーによれば、「類型人とその手段の隠れた意味が支配に向けられている」（EJ, Bd. 8, S. 303）以上、確かに労働空間において生じるあらゆる転回の中で、軍事への転回が最も重要であることは事実であるとしても、労働空間で見られるいかなる手段も「全体的労働性格の表現」すなわち「権力手段」として現象しないものは皆無であるからである（ibid.）。その意味では、

とりわけ戦争においては、次のように言われる。

> 都市と農村の区別と同様、前線と故国、軍隊と一般住民、民需産業と軍需産業の区別もまた、さほど重要性を持たなくなる。根源要素（Urelement）としての戦争は、ここに新しい空間を見出す。それが見出すものは、労働者の運動に供される、全体性の特別な次元である。（ibid.）

ここには、労働者の形態の最極端のあり方として、戦争状況での「全体性の特別な次元」が語られている。しかし戦争においてはまさに、戦時的状況での軍隊と、平時の一般住民の活動の区別がなくなることが指摘されている。これは裏を返せば、すでに示唆されてきたように、我々にとっての平時の生のあり方こそが、あたかも戦時下におけるような、総動員体制に支配されていることを物語っている、と考えられる。そうした観点に立って、次節においてはハイデガーの思惟を確認したい。

3．ユンガーに対するハイデガーの立場

主著『存在と時間』（1927）において、20世紀の当時の哲学の状況を「存在忘却（Seinsvergessenheit）」と規定することから、「存在の問い」を問うことの必然性を説き起こしていたハイデガーは、周知のように1930年代以降は「存在の歴史（Seinsgeschichte）」の問いへと向かう。そして、存在の歴史を問う連関の中で、『技術への問い（Die Frage nach Technik）』[12] を中心に現代の技術論を問題とすることになる。

それによれば、現代の技術（科学的テクノロジー）は自然を含めた様々な存在者を用象（Bestand）として用立てる（bestellen）という仕方で露わにすること（Entbergen）の全体的構造、すなわち総かり立て－体制（*Ge-stell*）をもつと分析されている（Bd. 7, S. 18ff.）。たとえば、山や川、森林や大地は、自然の原料あるいはエネルギーのために開発され、採掘されることによって、そう

した原料やエネルギーを供給する貯蔵庫となされる。そして、人間存在までもが「人的資源（Menschenmaterial）」と見なされることによって、現代の科学技術文明とともに成長してきた社会的活動、とりわけ生産活動や消費活動といった、経済活動を動かしていくための「資材」、すなわち「人材」として理解される。このようにして、物質的な自然はもとより、人間存在までもが、総かり立て体制の巨大な渦の中に組み込まれていくことになる。

こうした事態を存在の歴史という観点から捉え直そうとするハイデガーによれば、現代の技術の本質には、どのような存在者をも客観として表象する（Vorstellen）という、近代以降の自然科学の対象化の根底にある「立てること（Stellen）」が存している、と言われる（Bd. 7, S. 21）。そして、こうした在り方における現代の技術、すなわち科学的テクノロジーは、その起源であるギリシア語のテクネー（technē）が本来有していた「露わにすること（Entbergung）」の一様態としての在り方を喪失している、とされる。すなわち「露現することと不覆蔵性（Unverbogenheit）が、すなわち隠れなさ（alētheia）が、真理（Wahrheit）が生起する領域において本質現成する」（Bd. 7, S. 14f.）という存在の真理の本来的な関わりを、技術（Technik）は喪失することとなる。

このように自然科学と科学的テクノロジーの両者に共通する根本動向としてハイデガーは、「表象すること（Vorstellen）」と「用立てること（Bestellen）」との内に読み取られる「立てること（Stellen）」を見て取っていた[13)]。

ここに我々は、１節、２節で見たユンガーの思惟との連関を読み取ることができよう。そうした視点から『労働者』を振り返ってみるならば、そこにはすでに「技術」は「労働者の形態による世界の動員」（EJ, Bd. 8, S. 159）であると言われていた。後に『存在の問いへ』の中でハイデガー自身が述懐するように、自らの「技術への問い」、とりわけ「総かり立て体制」の思惟は、ユンガーの『労働者』思惟を契機としていると言う[14)]。これは、そもそも『存在の問いへ』がユンガーの60歳を記念して編まれた論文集に寄稿されたものであるという点を差し引いても、決して大げさな表現ということはないであろう。総かり立て体制のもとでは、上で見たように物的資源も人的資源も同様に、原料

もしくはエネルギーという範疇においてのみ捉えられて、社会の経済的発展という唯一の目的ために動員される。そこでは、物そのものの本来の存在も、人間存在の本来的なあり方も捨象され、無化されて、そもそも存在しないかのように取り扱われることとなる。

また、『労働者』の次のような記述からも、我々はハイデガーの思惟との連関を伺うことができる。

> 総動員は人間と事物の蓄え（Reserve）の全体を統一的な軍事的関連の下に掌握するのみならず、可変性、つまり人間と手段を投入する方法の柔軟性という際立った特徴を併せ持つ。このような枠組みにおいて、戦争用の軍隊と兵器は、上位の権力性格の個別的な形成物として現れ、同様に兵役義務はより包括的な奉仕義務の個別事例として現れる。（EJ, Bd. 8, S. 305f.）

ハイデガーの総かり立て体制が、現代の科学的、技術的な世界の「全体」を「統一的な」連関の内に支配することについては上述の通りであるが、そこで見られる「人間と事物」のあり方は「人的資源」、「物的資源」としての「用象（Bestand）」としての存在である、と規定されていた。この ‘Bestand’ は通常の用法では「在庫品、備蓄」を意味し、まさに上記の引用で言われた「蓄え、予備」としての ‘Reserve’ に他ならない。つまり、ここでの用法は表面的な用語の類似を超えて、ハイデガーとユンガーに共通していると考えることができ、その根本的な意義はいずれの場合も、統一的な全体の目的に資するべく用立てられ、その使用に備える「資材」、「資源」、「エネルギー」に他ならないということである。

以上の考察から、自然科学と科学的テクノロジーが一つの帰結として、自然環境の破壊と資源の枯渇を導く原因となることが理解されうるものとなるだろう。というのは、現代において最も有力な学となった自然科学を中心とする個別的諸学問の探究は、それぞれの研究対象を特定の領域に限定し、学問そのも

のが「科学」として細分化していくことによって、高度に専門化していく過程で、自然と我々の生活世界の本来のあるべき全体像を喪失し、そして、その応用としての科学的テクノロジーもまた、自然と我々の生活世界の部分的改変の総和以上のものとして、全体としての存在者の存在の無化を招来するからである。またそれと同時に、科学的テクノロジーそれ自身においても、自然を徹底して開発し、原料あるいはエネルギーとして収奪することを目指すものであるという本質の故に、まさに部分的改変、すなわち部分的動員の不調和に拍車をかけるものとなるからである[15)]。そしてこのような状況があからさまとなってからは、「持続可能な発展（sustainable developement）」というようなことが声高に叫ばれるようになり、経済的発展を唯一の価値基準とする世界観、人間観が現代の世界を覆い始めている。

この点に自然科学と科学的テクノロジーのみならず、西洋の形而上学の伝統に贈り与えられた「存在の歴運（Geschick）」に対するハイデガーの存在史的（seinsgeschichtlich）思惟を読みとることはきわめて妥当なことであると考えられる。

結　語

さて、以上に見てきたように、ユンガーの規定する、労働者の形態としての人間存在のあり方が、「総動員」という体制の中で、従来の個人や社会のあり方とは全く異なるものとなること、そして、こうした思想がハイデガーの技術論で展開される「総かり立て体制」と「用象」へと重要な契機を与えていたことが明らかとなった。この点においては、ユンガーからハイデガーへの影響が強調されている。

しかし一方で、ハイデガー自身はユンガーの思想を十分に評価しながら、その思想がニーチェのニヒリズムを継承する以上、やはり形而上学の内にあることを批判することになる。このことが端的に現れるのは『道標』に収められた『存在への問い』である[16)]。また2004年に刊行された『エルンスト・ユンガー

へ』[17] と題されたハイデガー全集の第90巻もハイデガーがユンガーの思想に積極的に取り組んだことを説明するドキュメントとなっている。両者の間には非常に親密な思想的交流があったことは、こうした思惟の上での交錯とともに、2008年出版された『ユンガー＝ハイデガー往復書簡』[18] からも伺い知ることができる。

このように緊密な連関の内にあるハイデガーとユンガーの思惟の交錯のダイナミズムについての研究は、やっと緒についたばかりであると言える。もちろんそこに両者を媒介する軸としてのニーチェをも交えて、三者のスタンスを明らかにした上で、そこから紡ぎ出される思想が現代のニヒリズムの時代にいかなる意義をもちうるのかが今後究明されなければならない課題として明確になったことを確認して結語に代えたい。

1）Vgl. Ernst Jünger, *Die Totale Mobilmachung*, in Sämtliche Werke Band 7（Klett-Cotta, 1980）, S. 125.（以下、同書からの引用は、EJ, Bd. 7の略号にページ数を添えて示す。また、邦訳はE. ユンガー『追悼の政治』（川合全弘訳、月曜社、2005年）所収。）

2）さらに続けて「すでにこの戦争［第一次世界大戦］の終わり頃に暗示されたように最新局面では、少なくとも間接的にさえ戦争遂行と関わりを持たない運動は―たとえ自分でミシンで作業する女性家内労働者のそれであれ―もはや存在しないのである」（EJ, Bd. 7, S. 126）とまで言われる。

3）ここで取り上げられているのは第一次世界大戦である。言うまでもなく我々は歴史上に第二次世界大戦をも経験している。ここでは、第二次世界大戦についてのユンガーの言及は考慮の外にあるが、本節での議論が第二次大戦に度を増して妥当するであろうことは言を俟たない。

4）Ernst Jünger, *Der Arbeiter Herrschaft und Gestalt*, in Sämtliche Werke Band 8（Klett-Cotta, 1981）.（邦訳、E. ユンガー『労働者　支配と形態』、川合全弘訳、月曜社、2013年。）以下、この書からの引用は、EJ, Bd. 8の略号にページ数を添えて示す。

5）後に見る「力への意志」のように、ユンガーは『労働者』の中でも、ニーチェの思想に由来すると考えられる概念、用語を多用する。このことについては、すでに『労働者』の

邦訳の中でも指摘されている。前掲邦訳、400頁、訳註24参照。

6）ニーチェは1887年11月－1888年３月の「遺された断想」11番［123］、「ニヒリズムの到来」と題された断章で次のように言っている。

ニヒリズムは「徒労！」についての単なる瞑想や、あらゆるものは没落する価値があるといった信仰に尽きるものではない。ニヒリズムとは手を下すこと、滅ぼす（**zu Grunde richten**）ことである……（中略）これは強い精神力と意志の状態であり、このような精神力と意志にとって、「判断による」否定にとどまることは不可能である。一行為による否定がその本性から生じる。判断による否－定（Ver-Nichtung）に手による無－化（Ver-Nichtung）が力を貸す。（F. Nietzsche, Nietzsches Werke, Kritische Gesamtausgabe, Band Ⅷ2, Nachgelassene Fragmente, Harbst 1887 bis März 1888, Walter de Gruyter（1970）, S. 301f. 邦訳『ニーチェ全集第10巻（第Ⅱ期）』（白水社）、369頁）

ここでは、通常考えられるような論理的な「否定性」、すなわち「……ではない」と言うことに対する、ニヒリズムの「無化する」作用の根源性が言われている。

7）著名なニーチェの『華やぐ智慧』125番では、次のように言われている。

……気違いじみた男はかれら［広場の人々］のなかに飛び込んで、するどい目つきであたりを睨めまわした。『神様がどこへ行ったって？』と、彼は叫んだ、『諸君に言ってやる！　おれたちが神様を殺したのだ―諸君とおれが！　おれたちは全部神様の殺害者だ！』（F. Nietzsche, Die fröhliche Wissenschaft, in Nietzsches Werke, Kritische Gesamtausgabe, Band V2, Walter de Gruyter（1973）, S. 158f. 、邦訳『ニーチェ全集第10巻（第Ⅱ期）』（白水社）、195頁以下。）

8）ただし『労働者』の邦訳者である川合全弘氏の指摘される通り、ユンガーは「労働者」を初めとする諸概念の全てを、叙述の経過とともに言わば「成長を遂げていく」有機的概念として見られるべきものであることを注記している。その意味では、ここでユンガーの「形態」の概念規定を、従来とは異なる形而上学を志向するものとして批判することにも、一定の注意が必要となるであろう。なお、本稿におけるユンガーの読解は、ユンガー研究の第一人者である、川合全弘京都産業大学教授の御訳業、御論考に負うところが極めて大きい。ここに記して、謝意を表したい。

9）実際ユンガーは『労働者』の第73節で次のように言う。

はっきりと分かることは、戦争や失業や始まりつつある自動作業化（Automatismus）

の状態が、孤立した個人や大衆としての個人の実存に無意味さの印を刻み込む一方、類型人の目には逆に高揚した活動のエネルギー源として映じる、ということである。

ここに見て取れることは、労働が類型人にとって経験的な性格でなく、むしろ形而上学的な性格を持つ以上、類型人に関しては、失業という状態が全く存在しないということである。(EJ, Bd. 8, S. 275)

ここで、「類型人（der Typus)」として理解されるのは「労働者」としての人間存在であることから、必然的に「失業という状態」は存在しないということになる。しかしこれは、必ずしもポジティヴな意味を有する言明ではない。というのは、このようにして与えられる労働は、決して人間存在の積極的な営為によって獲得されたものではなく、むしろ不可避的、必然的な「形而上学的な性格」として、有無を言わせず与えられたものにすぎないからである。

10）この点については、日本現象学会第35回研究大会（2013年11月、名古屋大学）でのワークショップ「ユンガーとニヒリズムの今」（オーガナイザー：松本啓二朗大阪教育大学准教授）において行った口頭発表、「ユンガーとニヒリズムの現在」の中で指摘した。その概要については、『現象学年報』第30号（日本現象学会、2014年）pp. 83-89を参照。また秋富、安部、古荘、森編著『ハイデガー読本』（法政大学出版局、2014年）の中の拙論「ニーチェとユンガー」（156頁～165頁）の中でもこの点について指摘した。

11）ユンガーの用語法ではさらに、個として概念化された人間である「個人（das Individuum)」が、「個々人」および「類型人」から区別されなければならない。（邦訳『労働者』、398頁、訳註を参照。）

12）Martin Heidegger, *Die Frage nach der Technik*, in *Martin Heidegger Gesamtausgabe Band 7*：*Vortäge und Aufsätze*（2000）．以下『技術への問い』からの引用は、Bd. 7の略記号の後にハイデガー全集第７巻の頁数を併記して示す。

13）そうした連関の内にあって、「人的資源」としての人間存在もまた、「雇用される（Angestellt)」ことになる、というのは第１節でのユンガーの指摘するところである。

14）Martin Heidegger, *Zur Seinsfrage*, in *Martin Heidegger Gesamtausgabe Band 9*：*Wegmarken*（1976)，S. 391. ハイデガーの述懐は次の通りである。

『技術への問い』は、『労働者』の内おける様々な記述に、長く続く支援を負っている。君［ユンガー］のなした「多様な記述」に関して次のように書き記しておくことが適切であろう、すなわち、それらの記述は、すでに熟知の現実的なものを単に描写するのではなくして、ある一つの「新たなる現実性」を通路づけるのであり、その際、「新

しい様々な思想とかある新しい体系とかはほとんど問題にならない……。」（『労働者』序言）

15）拙論「環境問題の根源としてのロゴスと超越ーハイデガーの思惟を手掛かりにして」（『愛媛大学法文学部論集　人文学科編』第10号、2001年、pp. 273-293）を参照。

16）この点についても、註10の日本現象学会第35回研究大会での口頭発表、「ユンガーとニヒリズムの現在」および、『ハイデガー読本』の中の拙論「ニーチェとユンガー」の中で指摘した。

17）Martin Heidegger, *Martin Heidegger Gesamtausgabe Band 90 : Zu Ernst Jünger*（2004）.

18）*Ernst Jünger - Martin Heidegger Briefewechsel 1949-1975*（herg. von Günter Figal）, KLETT-COTTA / VITTORIO KLOSTERMANN（2008）.

（本稿は科学研究費補助金及び愛媛大学法文学部人文系担当学部裁量経費による研究成果の一部である。）